7. Pre β-HDL の代謝とその意義について

河野幹彦
（自治医大大宮医療センター）

^{3}H- コレステロールで標識した種々の細胞を血清と incubate し，コレステロール〔C〕逆転送における pre β-HDL の役割を検討した。pre β_1 HDL は血清単独や赤血球との incubation (37°C, 90分)では約1/3に減少し，線維芽細胞，Mφ, SMC との incubation, DTNB や抗 LCAT 抗体の血清添加では増加傾向にあった。〔C〕efflux の約60%は pre β_1-HDL を介すると思われた。pre β-HDL は〔C〕の逆転送に重要な役割を果たしているものと思われた。

8. 自家骨髄移植（MSKCC の経験）

五十嵐忠彦（国立がんセンター東）

91年4月より1年間，MSKCC での自家骨髄移植チームに加わった。Ex-vivo Purging の研究では，Multi-Drug-Resistant の白血病細胞の効果的な除去に Photo-dynamic Therapy が有用であった。ポルフィリン誘導体のジヘマトポルフィリンエステルにより3～4 log の効果が認められた。

9. 当院における末梢血幹細胞採取，移植の試み

橋本真一郎，比留間潔，浅井隆善
（千大・輸血部）
王　伯　銘，吉田　尚（同・2内）
佐藤　武幸　　（同・小児科）

末梢血幹細胞の採取法と移植の実際について報告する。主に造血器悪性腫瘍患者15例を対象として合計56回の採取を行った。千葉大輸血部においては血液成分分離装置である Haemonetics V50の2 arm 法とサージ法を用い，採取，分離，保存までを同一閉鎖回路内にて行うことで，所用時間の短縮，循環血液量の安定化，感染の防止を試みている。移植症例はすべて造血回復しており，移植後の経過が非常に順調な症例もみられる。

10. 当院における Medical Oncology

脇田　久，五十嵐忠彦，伊藤　国明
藤井　博文　（国立がんセンター東）

国立がんセンター東病院は，厚生省の国立病院再編成計画に基づき，国立療養所松戸病院と国立柏病院を統合改組し，平成4年7月1日開院した。当院では肺癌や肝癌などのいわゆる難治癌に対する治療法の研究，さらには末期癌患者の診療研究なども行われている。当科では肺癌，乳癌，消化器癌，造血器癌などを対象とし化学療法を主体とした新たな癌治療戦略の研究がすでに始まっている。当科が目指す Medical Oncology について概説する。

11. 診断困難であった骨髄癌腫症の1例

篠浦　拓，太枝　徹，遠藤伸行
（済生会船橋済生）

症例は46歳，女性。平成2年5月に類白血病反応で発症した。骨髄検査にてリンパ芽球様細胞を99%認めるも原発巣はまったく不明であった。EAP 療法にて寛解するも1年半後に乳房に多発性腫瘤を形成して再発した。この時病理検査にて横紋筋肉腫と判明し，初診時骨髄標本再染色にて再確認された。

12. Toxic Shock Syndrome を併発した MRSA 腸炎の1例

豊田　充孝，関　直人，時田健二
与那覇文子，中村　貢，小関秀旭
三上　恵只　　（千葉市立）
板谷　喬起（板谷内科クリニック）

基礎疾患のない健常人に発症した MRSA 腸炎による TSS の1例を経験した。発熱，下痢等の急性腸炎症状および皮疹で発症。入院経過中に皮膚粘膜症状，心筋炎，汎血球減少，ショック症状等の多彩な臨床症状を呈した。便から MRSA が検出され，同株の TSST-1 産性を認めた。他の培養では陰性であった。対症療法および VCM の経口投与にて症状改善し血液検査および心電図の正常化がみられた。

13. 原発性胆汁性肝硬変と腎癌を合併した潰瘍性大腸炎の1例

石塚伸子，三村　正裕，田口忠男
岩間章介，田口喜代継，石原運雄
加藤繁夫　　（千葉労災）

症例は42歳，男性。90年7月，健診で肝機能異常を指摘され，抗ミトコンドリア抗体320倍，IgM 664mg/dl，肝生検所見より原発性胆汁性肝硬変（PBC）と診断。91年11月，血便のため大腸内視鏡施行し潰瘍性大腸炎（UC）と診断。92年4月，腹部超音波で右腎細胞癌指摘され，5月腫瘍摘出術施行。インターフェロン γ 投与後 UC が増悪。PBC と UC の合併は極めて稀であり，インターフェロン γ 投与後 UC が悪化したという点で興味深い症例であったため報告した。